私の服にはSTORYがある

CLOSE-UP
KAYO MATSUSHIMA
HER STORY

アイデアが浮かぶのは食器洗いをしているとき。アトリエは、ダイニングテーブル。私の作品は「普通の」家の「普通の」台所から生まれます

松島佳世さん　47歳

佳世さんが絵を描くようになったきっかけは、特別なことではありません。目の前のチャンスを見逃さず、挑戦するちょっぴりの勇気と行動力を持っていただけ。誰にでも、今と違った未来がやってくるチャンスはきっとある。彼女を見ているとそんな気がします。

家族を送り出したあとのリビングが私のアトリエ

四条河原町阪急のミミ＆ロジャーで買ったグラデーショ
ツは着心地も動きやすさも抜群。気分を上げてくれる一
を描き始めると、夢中になって時間を忘れてしまい、息
きて慌てて夕食を作り始めることもしばしばなんです。

名画の登場人物がペンギン!? ユニークな「ペンギン名画」で注目を集めているのが松島佳世さん。今年4月に東京で開かれた個展は大盛況でした。

「お母さんが子供さんを名画に親しませたいと連れてきはることも多いんです。教科書に出てくるような絵なので、子供さんもよく知っていて喜んでくれはります」

佳世さんは大阪在住。子供のころから美術館巡りが大好き。学生時代は西洋美術史を専攻していました。卒業後は「普通」に就職。絵とは関係のないインテリアコーディネーターとして「普通」にOLをしていました。27歳で結婚し出産。そんな毎日はなんとなく満足、なんとなく飽き足りなかったと言います。

息子が3歳のころ、ボックスティッシュの裏にあった「絵のコンテスト作品募集」の文字が目に飛び込んできました。学生時代、同好会でマンガを描いたことを思い出し、息子と猫の絵を描いて応募してみました。すると、アートスクールから「才能があるから勉強してみませんか?」とのお誘いがきたのです。

「え? 私、才能ある!? とその気になって(笑)」。次は、地元寝屋川市のコンテストに応募。すると、今度はなんと優勝。それがきっかけで、イラストの仕事がくるように。同時にアートスクールの通信教育で絵の基本を勉強し始めるようになりました。

当時、息子さんは幼稚園。動物園や水族館が好きでよく遊びに行っていました。

「ペンギンにハマっちゃったんです。お腹ぽっこりでペタペタ、よちよち歩いてるのがめちゃ可愛くて。それに意外とすばしっこくて、うちの息子にそっくりやなあと思って」

愛らしさにすっかり魅せられた佳世さんは、ペンギンを自分のキャラクター「not pretty penguins」として描くようになりました。彼女のペンギンはその名のとおり、可愛くない目つきをしています。それは、「小学生時代のちょっと憎たらしいんだけれど、憎めない息子のイメージからきているんです」。

39歳のとき、絵画が大好きな彼女に、ご主人が「名画とペンギンを組合わせてみたら?」と提案。

「ペンギンって鳥のクセに2本足で立っているし、人と姿がすっごく似ているんですよね。夫に言われたら、名画の中にペンギンが自然に見えてきてしまうようになったんです」

佳世さんは、最初の模倣名画、ゴッホの『耳を切った自画像』を描き上げます。そして、ダ・ヴィンチの『モナ・リザ』『最後の晩餐』、フェルメールの『真珠の耳飾りの少女』など次々と作品を生み出していきました。

「画材も描き方も試行錯誤で。とくに、ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』は遠近法が難しくて本当に苦労しました」

一枚の作品を仕上げるのには1カ月くらいかかります。朝10時から夕方6時までは勤めに出ているつもりで描くといいます。リビングの飾り棚に古いホットカーペットカバーを掛け、そこにキャンバスを置き、アクリル絵の具で描いていきます。絵の具はヨーグルトのふたに入れ、牛乳パックがパレット代わり。

「画家さんはどんな気持ちでこの絵を描いてはったんやろ、と考えながら描いているんです。明るい絵を描いているときは明るい気分に、暗い絵を描いていると暗い気分になってしまう。ゴーギャンを描いているときは、絵の世界にハマりすぎ『私の生きている価値は何?』とか訳のわからんことを言い出し、息子が心配して一晩監視してくれてたくらい」

やがて作風は話題を呼び、神戸や京都で個展や企画展を開けるチャンスが舞い込みます。「最初の個展は新設のギャラリーから企画をもちかけてもらい、タダでやらせてくれるというんで喜んでさせてもらいました」。

あれよあれよと舞台が広がり、今年、初の東京での個展を開くことに。しかも、全国紙4紙が取り上げてくれるほどの注目度。

「私自身がいちばんびっくりしてます」

高校時代、映画研究部に入っていたころ。佳世さんは上段の左端。この中にご主人がいます。でも、佳世さんの描くマンガの登場人物になっているので顔は秘密なのだとか。

帝塚山学院大学で西洋美術史を専攻していました。絵画の根底にある宗教や画家自身について掘り下げて調べる熱心な学生でした(笑)。マンガ同好会に所属し、マンガは描いていましたが、絵画は見るだけでした。

就職をし、インテリアコーディネーターの資格を取り、普通のOLをしていました。子供が大きくなってから住宅展示場でアルバイトをしたことも。きれいな家で過ごせるのが楽しくて、大好きな仕事だったのだそう。

一人息子が生まれた29歳のころ。子供中心の生活になんの疑問もなく、楽しく過ごす専業主婦でした。出産後初めて親子3人で百貨店に行ったときの写真です。ベビー服売り場を歩き回ったのを思い出します。

息子が幼稚園のころ。イラストを描き始めたのもこのころです。仕事が少しずつ来るようになってから、通信講座で水彩、油絵などの基本を学んでいきました。

「ペンギン名画」が少しずつ話題になり始め、初めての個展を開かせてもらえることになった42歳のとき。芦屋のギャラリーPawのオープンしたての時期に個展の話をいただいたんです。

KAYO MATSUSHIMA HER STORY

息子を描いた一枚のペンギン画が私を絵画の世界へと導いてくれた

芸術模倣は学ぶことが満載 勉強は技法だけにとどまりません

この『最後の晩餐』はパネル張りの作品。本物はテーブルの上に何が載っているのかわからなかったのですが、洗浄され、料理が魚だったことが確認されたんです。ギャラリーでは接客をするので、優しい印象のストロベリーフィールズのチュニック&パンツで。

作品の多くは売れてしまい手元にあるのはポストカードだけ。『最後の晩餐』だけは描くのにすごく苦労したので、どうしても手放せないんです。でも大金積まれたら考えます(笑)。

画材はアクリル絵の具。何種類も試してこれにたどり着きました。パレットは牛乳パックやヨーグルトのふた。古いホットカーペットカバーや息子のTシャツを敷いて描きます。

最初に描いたペンギンキャラクターがこれ。アイスの棒を足元に2本も散らばし、「ヤバッ、怒られるかなー」と微妙な目つきで私を見上げる幼いころの息子のイメージです。

京都の画材屋『画筆堂』さんにはよく立ち寄ります。ストロベリーフィールズのきちんと黒ジャケットに、イラストレーター・内藤ルネさんのロックなTシャツを合わせ今年風に。

ちょっとしたご褒美が毎日をハッピーにしてくれるんです

ゴーギャン展に合わせて こんな絵はいかが？

「名画を真似して大丈夫なんですか？」とよく聞かれますが、『パスティーシュ(芸術模倣)』は確立された一つの分野で芸術のパロディ。模写も芸術を保存するための大切な技術です。

ペンギン好きが高じて グッズも集まりました

ペンギンはどんなものでも大好き。小さな紙粘土の人形は私が作ったもの。キャラクターを3Dにしてしまいました。シルバーのペンダントは友達が作ってくれた宝物です。

クサガメが私の癒やし ベランダを散歩させます

息子が貰ってきたときはカメ吉という名前をつけたのですが、あるとき卵を産んでいるのを発見、雌と判明しました。その翌日からカメ子に改名。今では体長20センチの巨体です。

甘いものには目がありません 主食がケーキでもOKです

ツインクルージョン」は行き付けのお店です。フルーツたっぷりの大きなケーキが、500円以下で買えちゃうんです。

「妻」の顔も「母」の顔も、そして「画家」の顔も全部が私。いつも自然体でいたい

子供と遊んだ公園で買物の合間にちょっと息抜き

食べ盛りの息子がいるので、食材の買い出しはひと仕事。買物の合間に近所の寝屋川貯水公園でちょっと休憩。アオサギやコサギが舞い、ウシガエルが鳴いているのどかさに癒やされます。GAPのハーフカーゴにトリプルRのポロシャツで軽快に。

やりたいことができるのは家族の協力あってこそ

絵に夢中になっていると時間を忘れてしまい、息子が帰ってきて、「ごめんねー！」と慌てて夕食の支度を始めることもしばしば。今日着ているのはディアモール大阪のリップスターで買ったラクチンふんわりチュニック。明るく優しい母、妻に見えますか？(笑)

アーティスト仲間と訪れるのは隠れ家カフェ「パシモン」

閑静な住宅街の一角にある「パ・シモン」。併設のブティックはオーナーのセンスが光るセレクトショップです。人形作家の上田佳子さんとは大の仲よし。池を眺めながら話も弾みます。インターブラネットのサテントップスでつかの間の優雅な時間を楽しみます。

モノグサ親子の強い味方 半年伸ばしてもOKな髪型

地元で評判の美容室「CU-CU」の近藤さん。忙しくてなかなかカットに行けないので、伸びすぎてもまとまるスタイルをお願いしています。長い休み」ことにしか散髪をしない息子もこちらでカット。カッコよくしてくれるので、親子ともども大満足なんです。

笑顔と活気が溢れる商店街で、いつも元気をもらっています

下町情緒溢れる寝屋川商店街の「MOMO」さんは行き付けの青果店。おばちゃんに勧められて桃を試食。5個で千円はとってもお買い得で思わずにっこり。トリプルRの元気なTシャツで買物を楽しみます。「おばちゃん、いつもありがとう!」。

誰にもある小さな不満や心配も、マンガにすれば「まあ、いいか」と思えてくるから不思議です

知人の紹介で漫画展に出品させてもらったときのことです。彼女の作品を見た漫画家・河村立司氏が彼女に声を掛けました。

「君は時事マンガを描きなさい」

その世界ではとても有名な先生で、無名の新人にアドバイスを下さることは異例中の異例。それをきっかけに、彼女は大阪の伝統のあるマンガ家グループに入れてもらえることに。

「先生からは『新聞を隅から隅までよく読みなさい』と言われたんだけれど、なかなかできなくて。『たくさん描きなさい』とも言われたので、できることからコツコツやろうと、3コママンガを描き始めたんです」

タイトルは『オタク王子』。主人公のモデルは、今では高校生になった佳世さんの一人息子さん。多感な時期の息子をハラハラ心配しながら見守る母親・佳世さんと、ペンギンの姿をした夫の3人家族の日常を描いたエッセイマンガです。息子さんの心配もマンガにするとただのギャグになってしまうと佳世さんは笑います。

「私たちの世代の夫は、働く妻にそんなに理解がない世代ですよね。ちょっと腹が立つようなことって誰しもあるでしょう？　でも、夫をペンギンに見立てて描いていくと、愛らしくって、ま、いいやと思えちゃうんです」

2年描き続け、昨年、講談社のコンテストで佳作に選ばれる快挙を成し遂げました。

「漫画展の最中に入賞の知らせが入り、とっても嬉しかったですね。みんなに賞金たかられたけど(笑)。でも、課題も見つかりました。だからもっと描きたいんです」

もう一つ、佳世さんがチャレンジしようとしているのは、直島という島でのアートイベントへの参加です。もちろん、まず審査に通らなければ参加はできません。でも、佳世さんが「びっくり！通っちゃった！」と言っている姿が自然と目に浮かんできます。

「せっかく声を掛けてもらったんだから、チャレンジしたい。壁画とか描けたら嬉しいな」

久しぶりの「生ペンギン」に心が浮き立ちます

子供が幼いころ、よく訪れた「京都市動物園」。最近、本物のペンギンを見ていなかったので嬉しくて。撮影のために特別に柵の中に入れていただきました。あまりの可愛さに思わず手が出てしまいます。「つつかれたら大ケガですよ」と注意されてしまいました。

小さなペンギン君だった息子も今は見上げるほど。それでも尽きない子育ての悩みは、『オタク王子』のネタに。夫もペンギン姿で登場します。読む人が共感してくれれば嬉しい。